カブル，ラングーンなどを旅行して

鈴木友子

いけばな親善使節（アフガニスタン班）として昭和４９年７月１４日から８月９日まで矢内原ノリコ氏と共に，国際交流基金から派遣され，アジアの五ケ国を旅行する機会にめぐまれた。アフガニスタンのカブル，パキスタンのカラチ，インドのボンベイ・ニューデリー，ビルマのラングーン，南ベトナムのサイゴンを訪れ，合計１４回のいけばなデモンストレーションを行なった。

カブル，ラングーン，サイゴンなど単なる観光旅行では行きにくい都市が多かったので，カブル大学の地理科教授のアレッツ氏がアリゾナ大学でアフガニスタンの自然に関する講演をされたのをもとにして，簡単に歴史をつけ加えて，文明の十字路としてのアフガニスタンをスライドを用いて紹介した。

私共の旅行の第一の目的はアフガニスタン共和国成立一周年記念式典に於て，日本の民族芸術としてのいけばなをすることで，日本の祝意を表することでした。首都カブルは砂漠のオアシスの町，どのような花材が入手できるかわからなかったので，東京から黄菊・白菊・グラジオラス・アンセリウムなどドライアイスをつめて手荷物として持参いたしました。自由時間など一分もなく夜中に和紙で鶴を折ってモビールにしたり，釘打ちをしているとコーランの大合唱がきこえ夜が明けます。軍隊・銃剣を持つ兵士の隊列で厳重に警戒された会場，チャドリをきている人，羊の肉のごちそうの臭いなど東京では想像もつかないことばかりでした。

カブル・ラングーン・サイゴンの人々はいけばなというものを見るのはほとんどはじめてでしたので，最初に種子をまくということの責任の重大さに全力投球するだけでした。それに比してインドの上流階級におけるいけばな熱はおそろしいようでした。

この五ケ国から帰国してみると日本は何と平和なよい国であろうかと思い，いけばなが言葉のちがいをのりこえて人々の心に語りかけるその良さも強く感じました。親善使節ということは各国の良さも吸収したいので，カブルだけでなくバーミアンにも行ける位の余裕が日程にあったらとも思います。出発前に地理科の研究室で参考書を見せていたゞいたことが，現地でとても役に立ちうれしいことでした。（３月１５日）

利根川中流部の野菜生産

――関東地方の野菜生産構造に関連して――

斎藤　功

利根川右岸の埼玉県豊里村（現深谷市北部）・妻沼町，左岸の群馬県境町・尾島町を含む利根川中流部の地域は野菜生産に専門化していることに特徴がある。この地域では，野菜類の販売額を第１位とする農家の割合が５０％を超え，なかでも豊里村の中瀬・八基・新会，妻沼町の男沼地区（旧村）